違いを越えて

岐阜市立精華中学校　　　２年　　大熊　千尋

　私の部屋の机の上に、一枚の写真が飾られている。アレックス、ケイティ、リア、ナタリー、そして私の五人が、笑い声が聞こえてきそうなほどの笑顔で写っている。

　父の仕事で、私は四才から八才までの四年間をアメリカで過ごした。そこでは私は、「外国人」だった。見た目も、言葉も、何を当たり前だと感じるかも、何もかも私は周りと異なっていた。

　学校では先生たちが口々に

「いじめは恥ずかしい行為です。」

「この学校では、差別的な発言や行動は一切許しません。」

と言っていたけれど、ダメだと言われると、それを陰でやる人たちがいることを私は知っている。

　私の下手な英語をまねしてからかってくる子がいた。私の細い目を笑って、指で自分の目尻を思いきり横に引っ張りながら近づいてくる子もいた。その場では平気なふりをしたけれど、私は家でたくさん泣いた。

　「違う」って、素敵なことなのに、どうして否定されたり拒絶されたりからかわれたりするのだろう。

　日本で暮らしている日本人以外の人も、大変な思いをしているだろうなと思う。肌の色や着ている服が違うとじろじろ見られたり、あまり上手ではない日本語で話しかけるといやな顔をされたり、何もしていないのに怖がられたり。

　人権とは、全ての人が人間らしく生きる権利。全ての人が幸福を追い求める権利。日本人だろうとアメリカ人だろうとそんなことは関係なく、誰もが持っている権利。それを奪ったり奪われたりすることは絶対に許されないし、自分の権利ばかり主張して人の権利を軽く見ることも、あってはならない。

　人種や国籍に関係なく、人は「人」という一種類しかない。たった一種類の私たちが、小さな違いにばかり目を向けて争うのは悲しいことだ。

　写真の五人は、みんな違っていた。私は日本人だし、ケイティはまっ白な肌にそばかすがとてもかわいらしいし、リアはアフリカンアメリカンでチョコレート色の肌と黒髪がきれいだし、アレックスの赤っぽいクルクルの髪に私はあこがれたし、ナタリーはお父さんとお母さんが違う国の出身だ。

　そんなバラバラの私たちが、違いなんて気にせずいつも一緒に笑っていられたのは、同じ目標に向かってみんなで努力していたからだと思う。

　私たちは器械体操を習っていて、同じチームのメンバーだった。一週間に九時間、一緒に練習したし、練習のない日に家でみんなで柔軟体操をしたこともあった。

　どうやったらもっと美しく平均台での技ができるか、鉄棒の着地でふらつかないためのコツはないか、床演技の静止ポーズでは指先を内側に向けるべきか外側の方がきれいか。

　全員が上達するために話し合ったり教え合ったりする私たちには、言葉の壁も人種の違いもなかった。そこにいたのは、体操が上手になりたくて共に努力する五人の小学生だった。

　いろいろな違いのある人たちが、違いが見えなくなるくらい一緒に熱中できる活動があるといい。スポーツでもいいし、アートでもボランティア活動だっていい。地域や県や国が、そのような場を提供してくれたら、「違い」を持った人たちが違いを越えて、「仲間」になっていくだろう。

　まずは、私にできる小さなことから始めたい。コンビニで買い物をする時、レジの店員さんが日本人でもそうでなくても目を見てありがとうございます、と笑顔で言う。いろいろな国の人が参加するようなボランティア活動に参加する。小さな一歩だけれど、「外国人」であることの寂しさを私は知っているから、同じつらさを味わう人を一人でも減らしたい。

　私の母は、岐阜市国際協会のボランティア通訳に登録している。

「アメリカに住んでいた時、外国人の私にも心を開いて仲良くしてくれた人がいて、とても嬉しかったの。だから今度は日本で私が外国の人を受け入れてあげたい。」

と母は言っていた。私も英語を勉強して、いつか母と一緒に通訳ボランティアをすることを目指している。

　違いなんて表面的なもので、人は人という一種類しかないこと。一緒に熱中できることがあれば違いなんて見えなくなること。違いを越えて自分も周りの人も大切にすること。当たり前のようで、でもなかなか実現できないこれらのことがいつか本当に当たり前になるよう、私は私にできることに精一杯取り組んでいきたい。「外国人」という言葉そのものが必要なくなる日が、皆平等に人権を得たと言えるスタートラインなのかもしれない。